

4 調査結果

4.1 底質性状

底質性状調査の結果を図 - 4.1 および資料編に示します。

干潟を構成する材料の粒度は主に砂質分および泥質分であり、一部に礫の混ざる場所がみられました。砂質分と泥質分の比率は場所により異なり、平成 12 年度と平成 14 年度の調査ラインでは堤防寄りでは泥質分の比率が比較的高く沖側で砂質分の比率が高い傾向がみられましたが、それ以外のラインでは逆に堤防寄りでは砂質分の比率が高く沖側で泥質分の比率が高い傾向がみられました。このような違いは調査した場所の地形や流況の違いによるものと考えられます。

干潟の有機物量を示す COD は 0.7 ~ 15.1mg/g、TOC は 0.6 ~ 14.5mg/g の範囲であり、全体的には低い値でした。前述の粒度組成で泥質分が優占する場所では、これらの値がやや高くなる傾向がみられました。

栄養塩類の量を示す全窒素は 0.11 ~ 1.38mg/g、全リンは 0.210 ~ 1.08mg/g の範囲であり、全体的には低い値でした。COD や TOC と同じく、泥質分が優占する場所では、これらの値がやや高くなる傾向がみられました。

全体的には、極端な有機汚濁や富栄養化を示す値は確認されず概ね酸化状態にあり、多摩川河口干潟の底質性状は比較的良好であるものと考えられました。

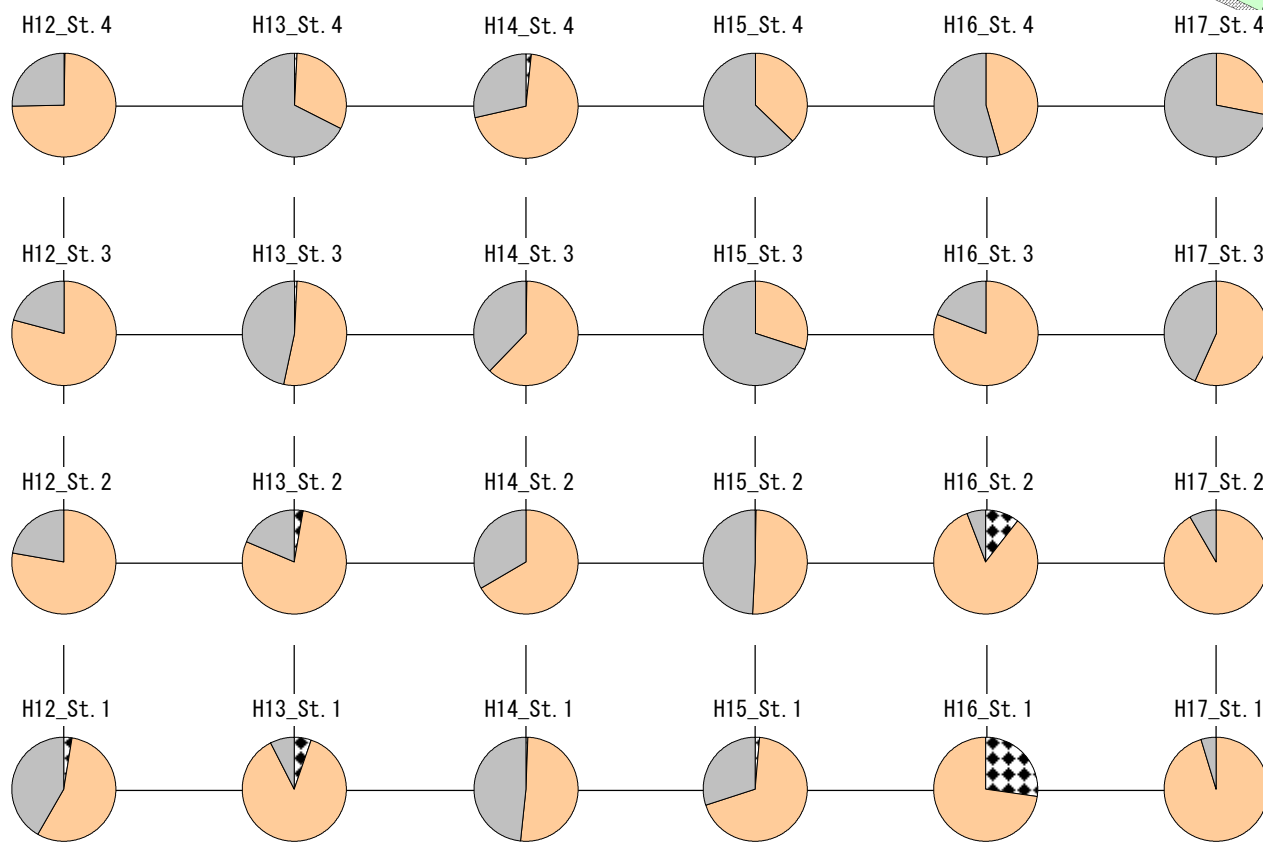
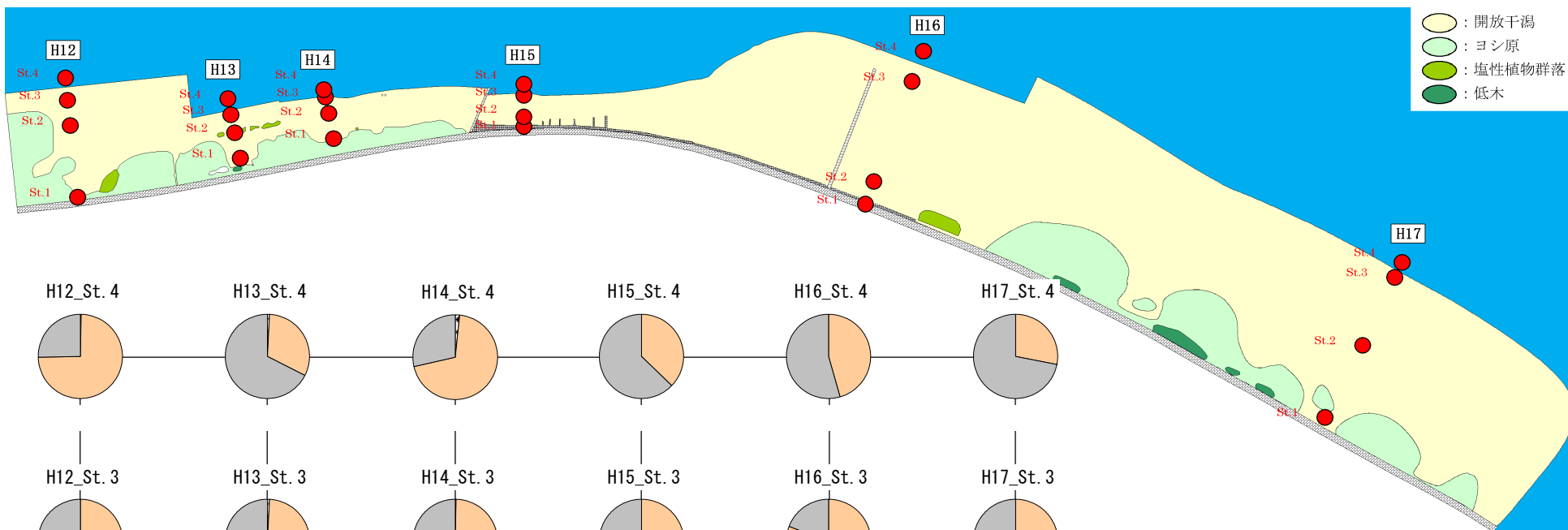


図-4.1(1) 底質調査結果 (粒度)

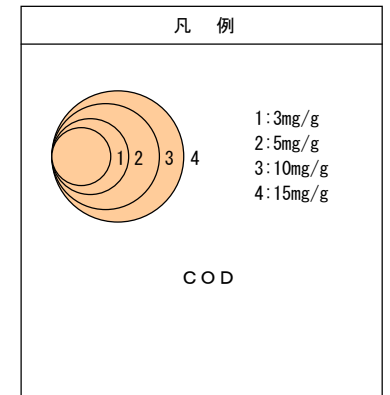
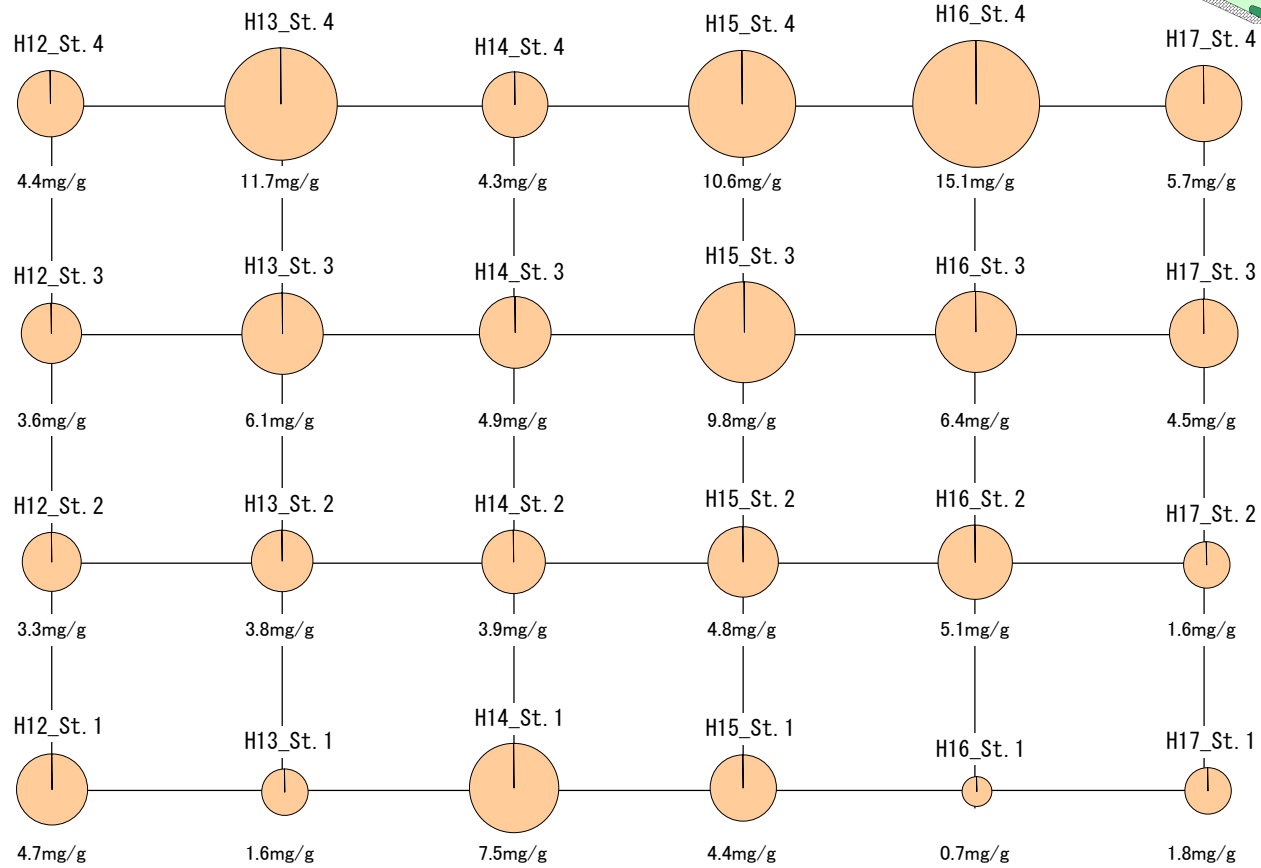
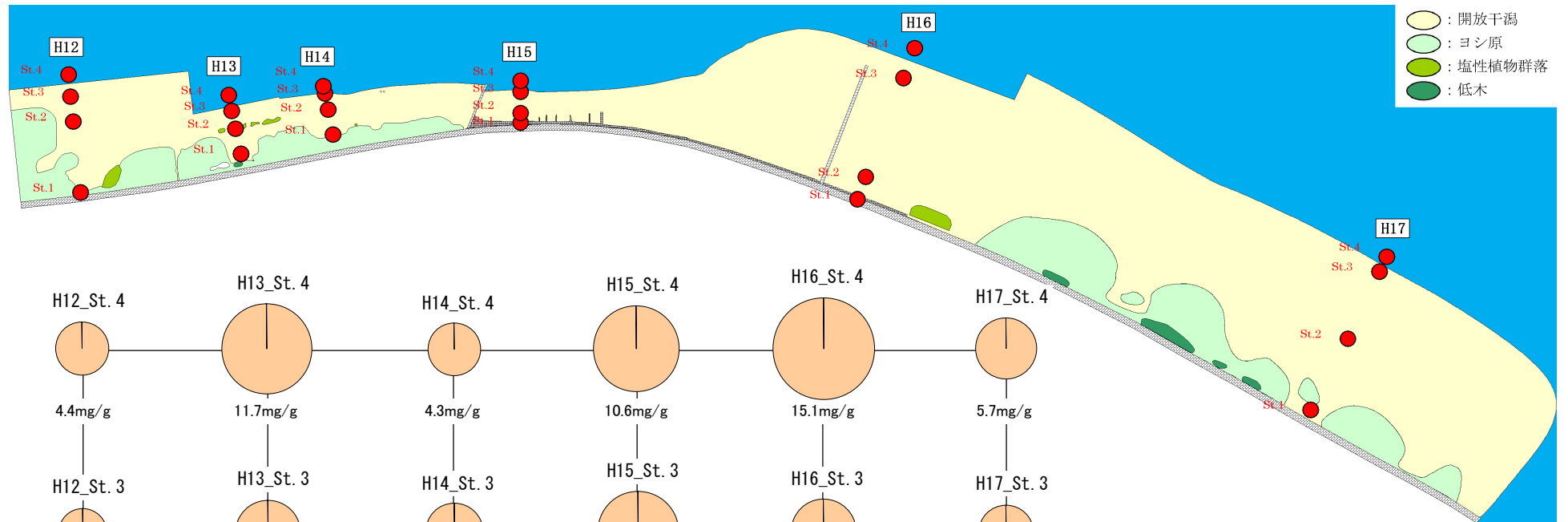


図-4.1(2) 底質調査結果 (COD)

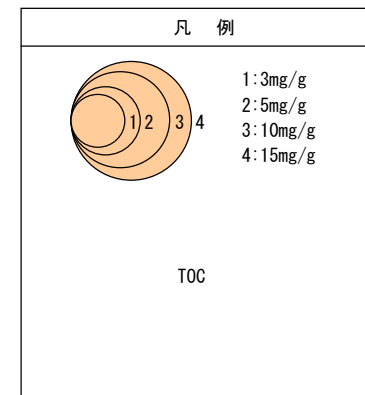
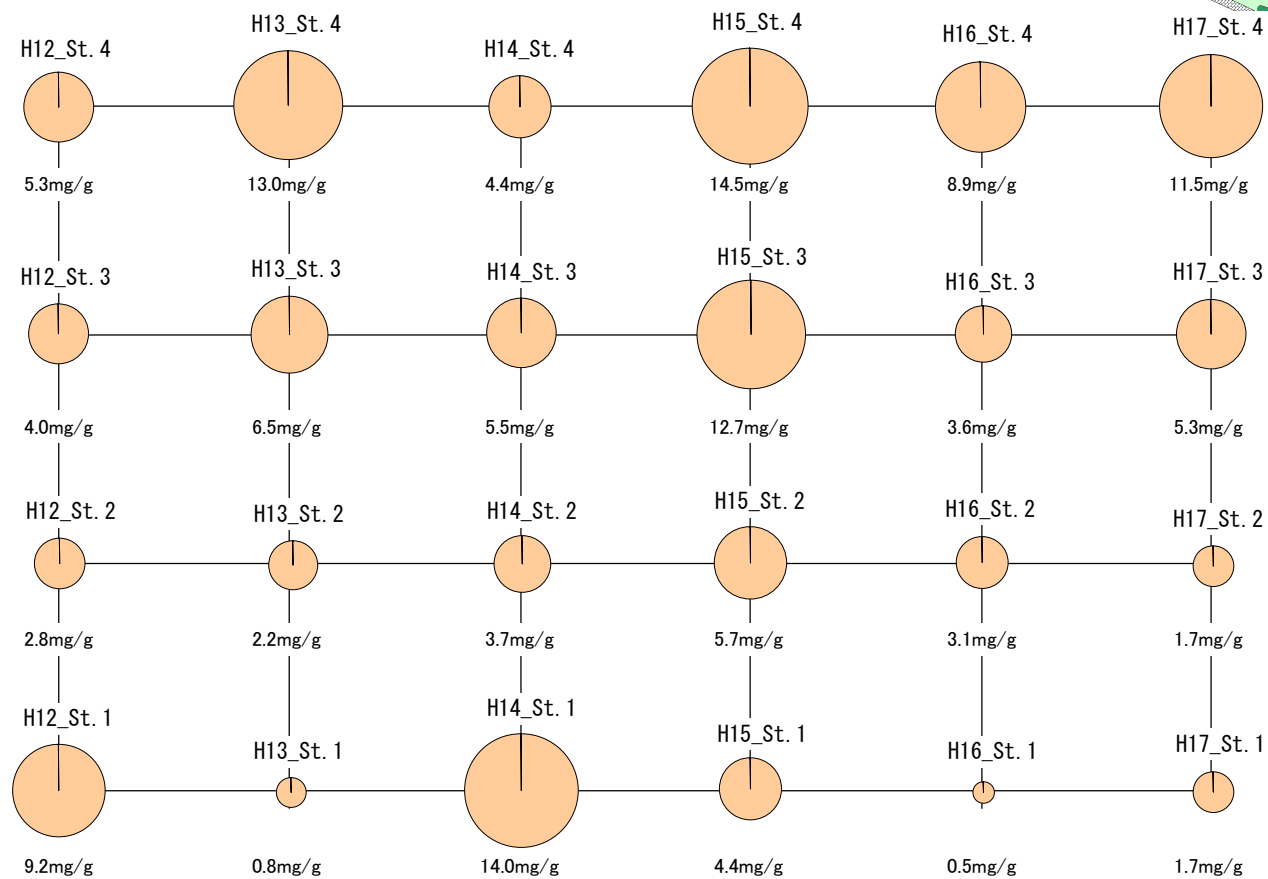
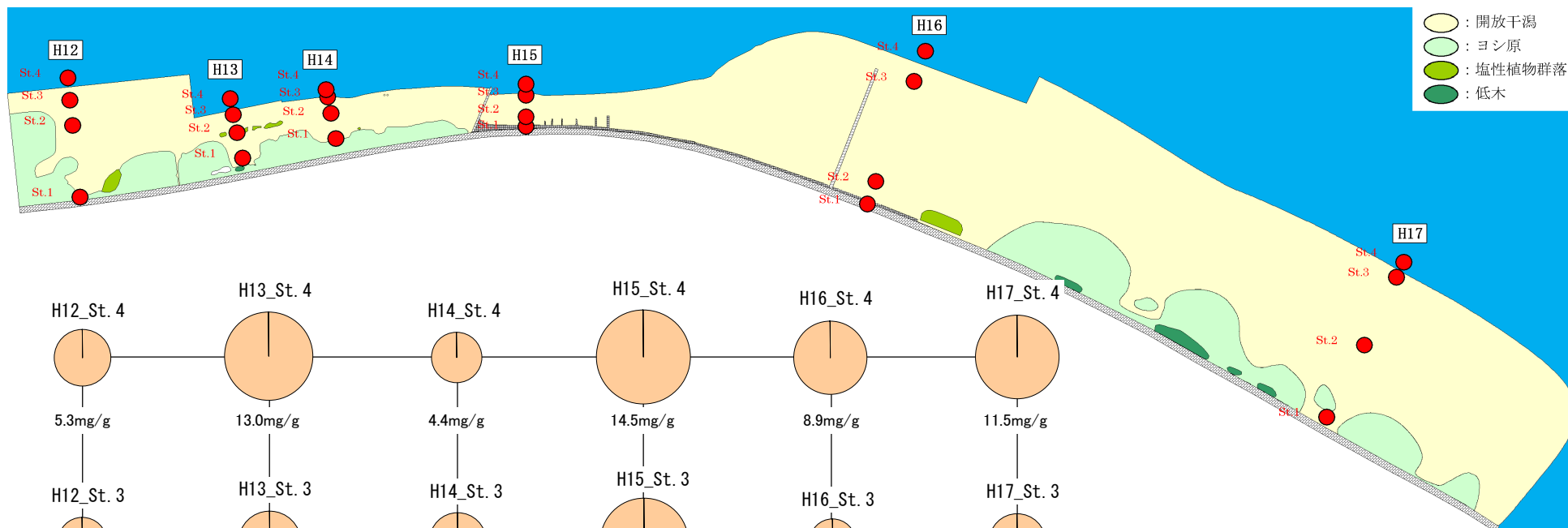


図-4.1(3) 底質調査結果 (TOC)

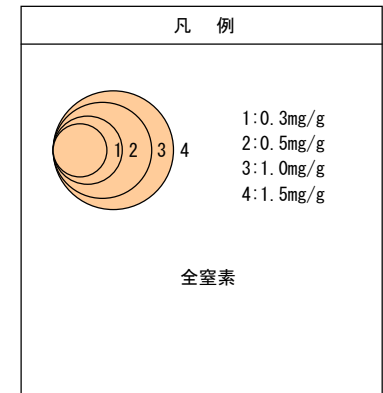
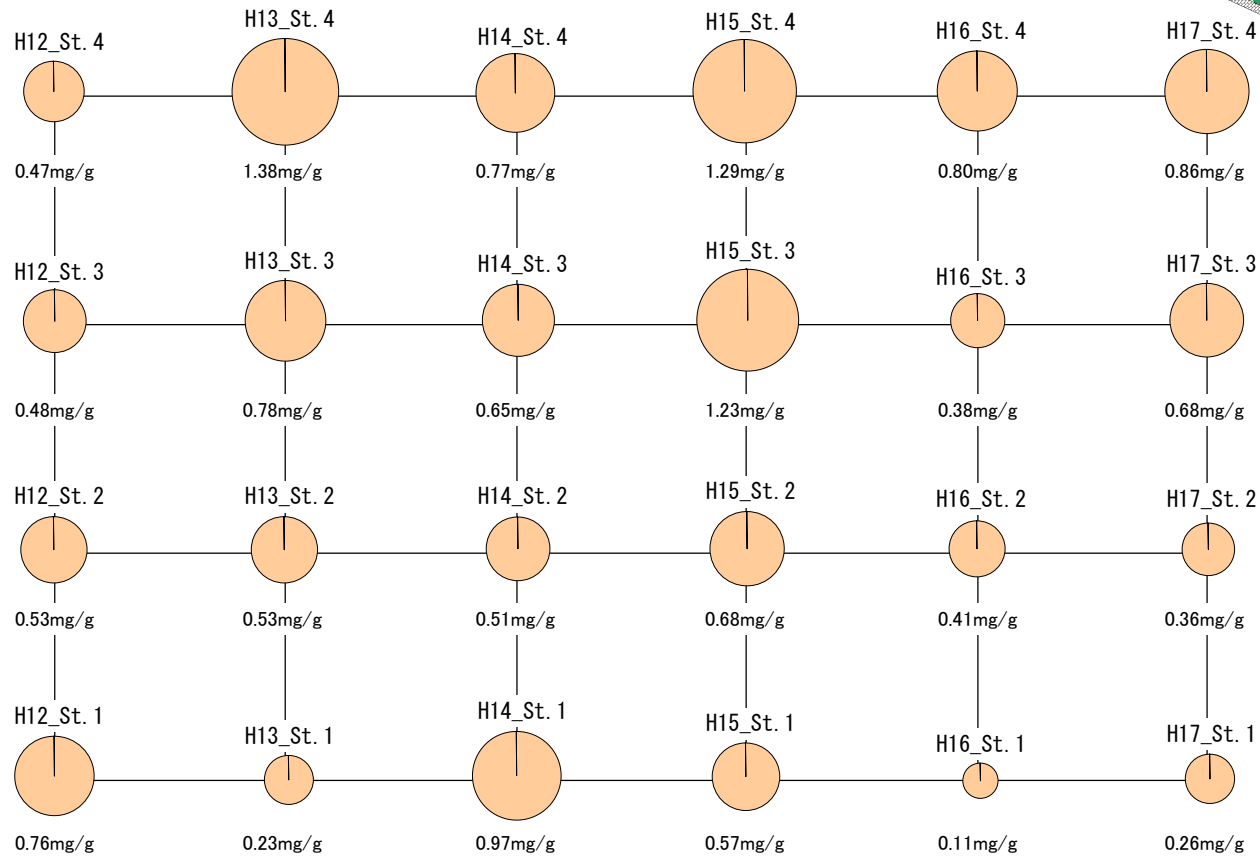
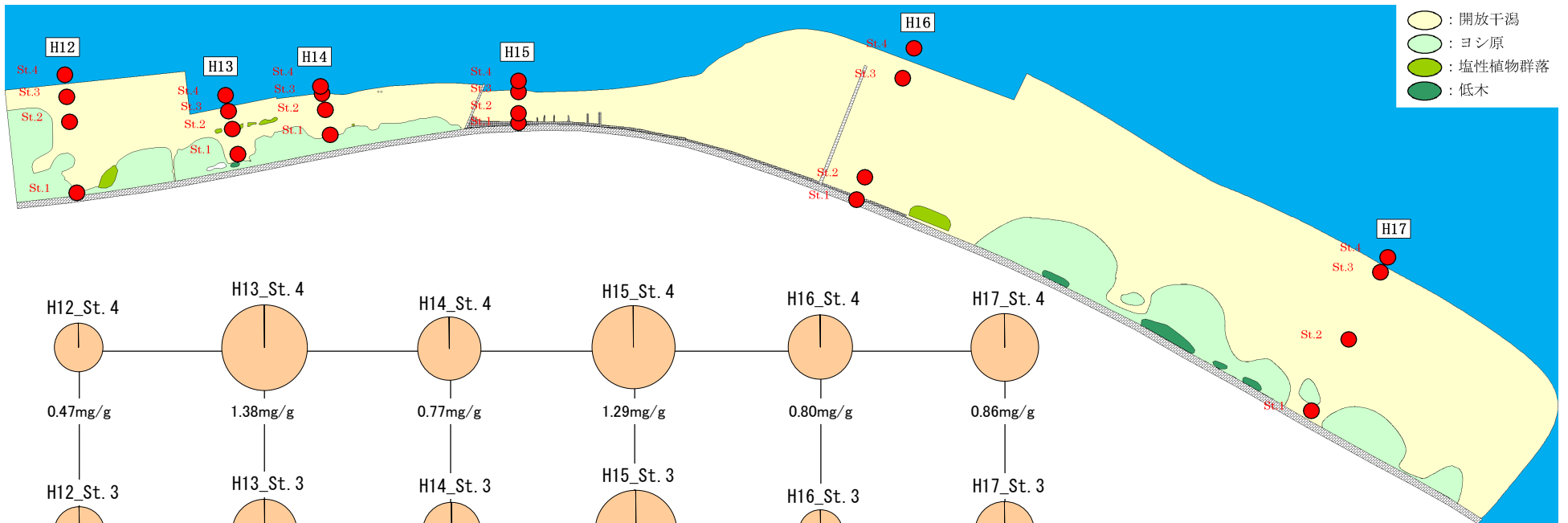


図-4.1(4) 底質調査結果 (全窒素)

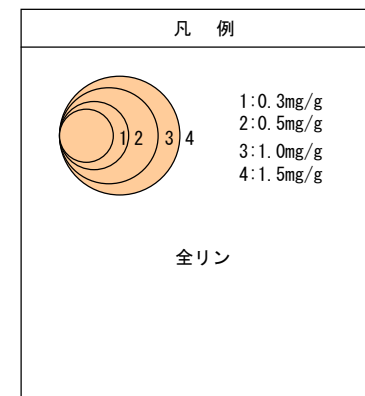
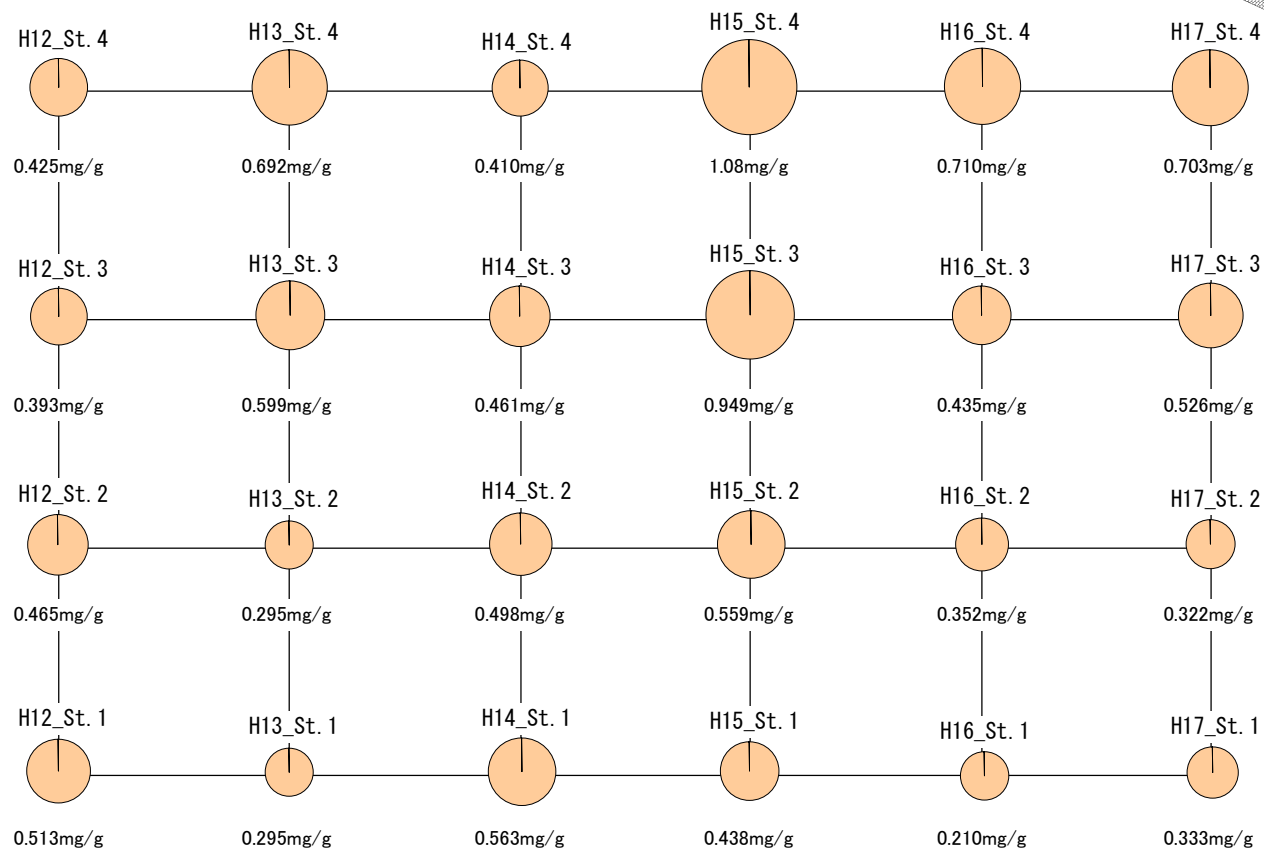
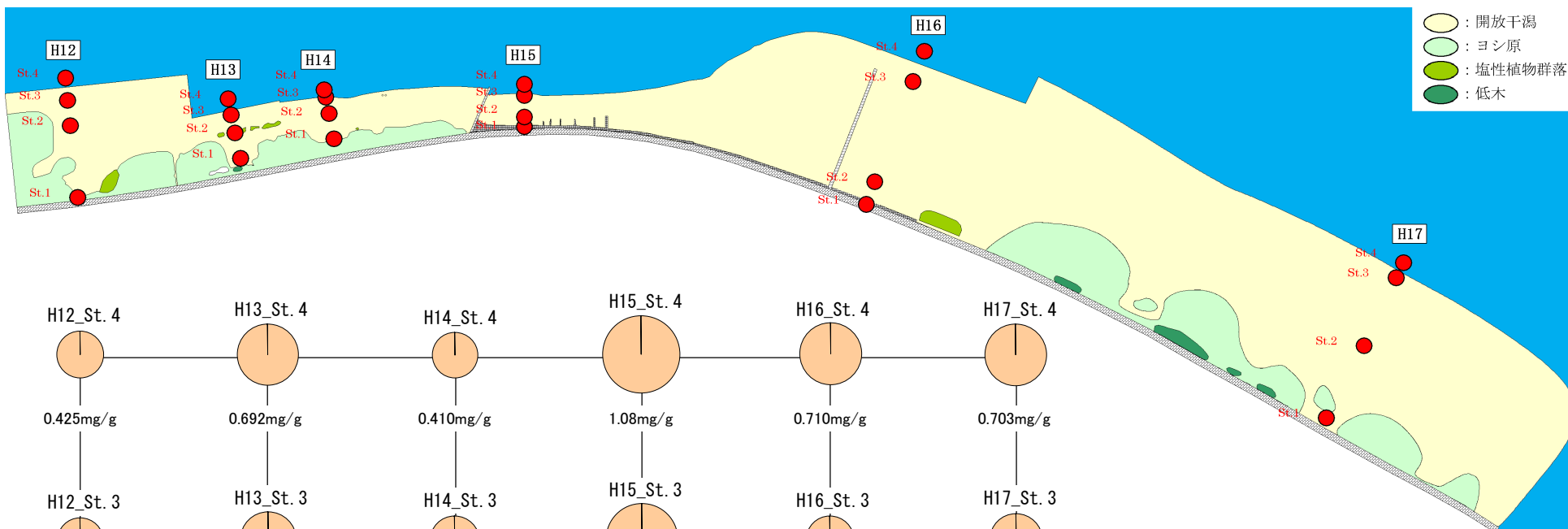


図-4.1(5) 底質調査結果 (全リン)